

新型コロナウイルス感染症は梅雨明けから初夏にかけて終息し 夏休み以降、国内とアジア各地への旅行が再開できることを期待

大胆な予測ではありますが、我々日本と東南アジア各国や特定の国々に、日本の早期終息の理由とこれからの人類の新型コロナウイルス対策のヒントがあると考えます。

*表記のデータは4月8日現在のものです。

政府から企業や個人への経済的支援は待たなしです。そして世界中が、新型コロナウイルス感染症（以下コビッド19という）の収束の為に結束して対応していかななくては、世界恐慌という最悪のシナリオが現実のものになってしまいます。1929年頃の世界恐慌時には、世界の貿易はそれまでの50%以下になり、アメリカでは株の大暴落、100行近くの銀行の破綻、大量の失業者が発生しました。そしていくつもの後進国は国家破綻（債務不履行）に陥りました。日本では昭和恐慌といわれ農村では餓死者が続出し、家族のために丁稚奉公や身売りする娘なども多数いました。世界恐慌の状況の中で日本は、そして世界各国は第二次世界大戦へ突入していきました。経済の問題が引き金となり、国家間の紛争や戦争に発展していったこと考えると、コビッド19の収束と世界経済の立て直しをセットで考えていかなければ取り返しのつかない事態になる可能性があります。

4月8日現在のデータによりますと、コビッド19の感染者は世界中で160万人を超え、死者の数は75,000人とのことです。各国のコビッド19の感染被害の大きさをはかる上で、感染者の数値は検査状況に差があるため、死者数で検証する方が的を得ていると思います。死者の多い国を順に列挙しますと

イタリア：約18,200人
スペイン：約14,600人
アメリカ：約14,800人
フランス：約10,870人
イラン：約4,000人
中国：約3300人（4月8日現在）
（日本：85人）

となっています。

感染者数が最も多い国はアメリカで、43万人以上です。日本は約4,770人（4月8日）ですから、アメリカの感染者数は日本の90倍、死者数は日本の180倍です。人口は日本の2.5倍程度ですので、同じ人口比率で計算しても、アメリカの被害者は感染者数で36倍、死亡者で73倍日本以上に出ていることとなります。

お隣の韓国では感染者が約1万人、死者が204人ですので、日本の人口の半分以下の韓国が、感染者、死者数で日本の2倍位ですから、人口比率でいえば4倍の犠牲者が出ていることとなります。

日本より後から発症し始めた欧米や韓国に比べて現時点では、日本はかなり感染を抑制していることが分かります。その理由を現状の統計、情報を分析し、それをもとに日本のCOVID-19終息時期を予測しました。またこれによって、今後我々が新型コロナウイルス対策として注意しなければならないことを再認識し、欧米など日本よりはるかにひどい被害が出ている国々への今後のCOVID-19対策のヒントとしたいと思います。

社会的距離 (social distance)

最近、頻繁に言われ出した「社会的距離」が、欧米と日本ではかなり違います。欧米では、初対面でも握手をしながら至近距離で顔を近づけて自己紹介をしたりします。日本では、ほとんどの方はお辞儀をするだけですし、恋人同士でもない限り、外ではそれほど近い距離で話したりしません。また欧米では親子や親しい友人とは、頬をくっつけて挨拶をしたり、しょっちゅうハグをしたり抱き合ったりしますが、これらは日本ではあまり見られない習慣です。欧米では恋人同士では街中でも人前でもキスをしたりする光景を目にしますが、日本ではごく一部の若者を除いては街中でそういう光景を目にすることはありません。これらの違いが、感染者が近くにいたとしても濃厚接触するかどうかの差になっているのだと思います。日本人の習慣や礼儀といったことの中に感染の拡大が抑えられている一因があると思います。学校や職場、会議、食堂などでのイスの配置なども距離や間隔をあけることで一定の効果はあると思いますが、イタリアなどで、屋外で食料品を買う際の順番待ちで列に並ぶ際、2m位間をあけて並んでいる光景をテレビで見ましたが、散々感染が広まってしまった後に屋外にも関わらず極端に間隔をあけて並んでいる姿は、手遅れ感と片手落ちな感が否めません。

家族形態

若者が感染しても本人は発病もせず自覚がないままに老人と濃厚接触をして感染して老人を死に至らしめるというパターンが今回のコビッド19の特徴のようです。

皮肉なようですが、今日の残念な日本の家族形態が老人への感染をある程度で防ぎ、拡大を遅らせているのではないのでしょうか。イタリア人やスペイン人、フランス人といったラテン系の民族は、老人と一緒に住む大家族が主流です。一方日本では核家族化が進み、独居老人が増え、年寄と一緒に住む人が昔と比べてかなり少なくなっています。(特に都心) ヨーロッパではラテン系の国々で特に感染者や死者が大量発生し、日本はこれらの国々と比較して感染者、死者が少ない理由の一つが大家族か核家族かの違いであると考えられます。日本では今後も病院での院内感染と特別養護老人ホームなどでの集団感染に特に注意を払う必要があります。

BCG予防接種

すでに学者による研究が開始されているようですが・・・

日本人の肩には予防接種の跡が残っています。すでに撲滅されたかに思える結核の予防ワクチン、BCG接種跡です。すでに結核は克服したとの観点からアメリカとヨーロッパのほとんどの国はBCGを摂取していません。しかし日本が感染者、死者数が欧米より少ない理由の一つがBCG予防接種であるかもしれないということがにわかに言われだしました。例外的にヨーロッパ諸国の中でBCGを行っているポルトガルは、コビッド19の死者380人と、国境で接しているスペインの死者14,600人と比較しても極端に少ないことが分かります。人口はスペインが4700万人、ポルトガルが1030万人と4.5倍のひらきがありますが、人口比率で比較してもスペインの死者数はポルトガルの8.3倍になります。この違いについても様々な理由が考えられますが、BCGの免疫効果がコビッド19に対しても有効という可能性が期待できるのではないかと思います。BCGならば今すぐにも実施していくことができるのではないのでしょうか。少なくとも実行したとしても危険なものではありませんので即、開始してはと思います。日々、多くの方が亡くなっている現状、時間をかけて臨床検査をしているよりも、たとえ外れてもいいから、BCGを摂取していない諸外国で実行してみてもはと思います。

外出時のマスクの着用

日本では早い段階でマスクを使用する人が増加し、2月の初旬では都内では9割くらいの方が外出時にマスクを着用していました。一方、欧米では健康な人がマスクをつけるという習慣がないとのことで、すでにコビッド19の感染が広まっていた3月でも大半の人がマスクを使用せずに、感染の自覚のない人たちがマスクを付けずに拡散し続けていたと考えられます。そして多くの国民がマスクの有効性を意識し始めた頃にはマスクが手に入らないといった事態になっていたようです。日本では早い段階で多くの方がマスクを着用したという事が欧米と決定的に違う結果をもたらしたと言えます。

4月3日には安倍首相が1世帯2枚の布製マスクを配布するという、「アベノマスク」と揶揄される施策を提案されました。賛否両論ではあり、この時期は何をやっても批判される種はつきません。肯定できる点は、国が大量に国民にマスクを無料配布することで、一般に販売されているマスクの買占めやネットでの高値販売などがかなり抑制され、本来の市場価格に落ち着き、市場にマスク製品が十分いきわたるのではないかと思います。すでにシャープのマスクは販売を開始し、アイリスオーヤマも生産を開始していることなどから国内のマスク不足問題の解消は目前と思われます。国内で十分にいきわたった後は、日本以上に深刻なアメリカやヨーロッパへ大量のマスクを無償供与して日本からの人道支援を行うことも可能になるでしょう。

PCR検査

「日本の感染者が少ないのはPCR検査を十分にしていないから」という指摘や批判をWHOや海外メディアからもずいぶん指摘されてきました。また、お隣の韓国で「ドライブスルーPCR検査」がスタートした際には、「お手本」という評価が多く、「日本も見習わなければ・・・」という意見を頻繁に目にしました。

なるほどうまく考えたなと思う反面、今となってはその何十万件の検査結果がはたして感染の拡大防止にどれだけ役に立ったのかという疑問がわいてきます。事実、3月25日時点でのPCR検査の件数は、イタリアで20万件、韓国で31万件であるのに対して、日本では34000件（4月1日）あまりと、極端に検査数が少ないと言えます。しかし、これが厚生省の対応の悪さなのか意図的な結果なのかは別としても、感染者も非感染者もPCR検査のために病院に殺到し、その為に一層感染が拡散されたとしたなら皮肉な結果です。少なくとも日本と比較して数十倍の検査を行ったイタリアや韓国の感染による死者数が日本より圧倒的に多いことを考えれば、日本のPCR検査の不備を指摘していた専門家やコメンテーターはこの結果をどう考えているのでしょうか。単純に検査数だけでよし悪しを判断し、現場でどのような感染防止対策をしてPCR検査が行われたかを確認しなければ、検査をしたこと自体が良かったかどうか判断できません。今後、日本がPCR検査を増やすにしても他国のような感染者を増やすようなことにならない為にも慎重に安全対策を講じて頂きたいと思います。無責任な意見をもっともらしく公共の電波で垂れ流していることは百害あって一利なしと言わざるを得ません。最近ではタレントをコメンテーターに仕立てて番組を構成している局も多く、このような世界的な危機的状況について、「受けてなんぼ」「目立ってなんぼ」といった芸人やタレントがもっともらしく語っているのを聞いていると、まじめに真実を知ろうとしていてテレビを見ているのがばからしくなることがしばしばあります。

国民性

元来、日本人は一般的に清潔好きな国民であること、また欧米のように土足で家の中まで入る習慣がないこと。飲食店に行けばたいていおしぼりが提供されることなどは、衛生面における日本の欧米に対する優位性であると言えます。欧米では多くの人が外食の際、手も洗わずにパンを手でちぎって食べているのを見かけます。日本人は基本にお箸を使い、手掴み普通は行いません。

日本ではコビッド19の感染拡大の初期段階で、手洗いやうがいの励行を国が喚起し続けてきたことも、かなりの効果が表れていると考えられます。

マスクの着用についてもそうですが、一般的に日本人は、何かにつけて「右へならえ」の傾向があり、ともすれば欧米の人からは「自分の意思がない」「自己主張がない」などと皮肉を言われることもしばしばありますが、コビッド19の感染拡大の防止には、日本人の協調性や社会的秩序、民度の高さが功を奏していると言えます。

志村けんさんの死去から学ぶ

2020年3月29日、タレントの志村けん氏が死去したニュースにより日本におけるコビット19に対する国民の感覚はより慎重になったようです。特にこれまで無関心、無防備だった人たちにもこの世界的問題についてまじめに向き合うきっかけを与えたことは間違いありません。

志村けん氏は晩年、結核を患い、胃の切開手術なども受けておられました。また後輩たちを連れての毎晩の銀座通いも有名で、最近まで喫煙もたばこ3箱とのことでしたので、不摂生により免疫力はかなり低下していたことでしょう。人間は、加齢とともに免疫力は低下してきますが、さらに持病や内臓疾患、不摂生が加わりますと免疫力が極端に低下し、コビット19ならずともインフルエンザでも死に至らしめられることになります。決して死者に鞭打つ気持ちはありませんが、高齢に加え、持病のある方や健康不安のある方、平常から不摂生な方は人一倍コロナ対策と心構えが必要だという事をあらためて彼の死から突き付けられた気がします。

ウイルスと季節要因

「これまでの定説ではインフルエンザウイルスなどは春から夏にかけて徐々に収束し、平均気温28度くらいになればほぼ終息していたが、コビット19にはそれを期待できない。なぜなら、暖かい国や暑い国でもすでに発生しているではないか・・・」

という論調を見かけます。しかし、それにはいくつかの疑問点を感じています。

- 1) 発生から現時点まで北半球、すなわち冬～春の気候で拡散していたが、南半球の夏の状態では拡大しませんでした。4月8日の感染による死者数は、オーストラリア45人、ニュージーランド1人という現状です。ただ、南半球は今から冬に向かっていくのでこれから先の感染拡大が気になるところです。日本の経験値やノウハウなどを十分に伝えて感染被害を最小限に食い止めてほしいものです。
- 2) アフリカやアジアー帯の暖かい国、暑い国へも商用、観光で中国人は行き来しているし、これらの国々から中国へのたくさんの人が往来している。それを考えればこういった国々で発症しても当たり前です。しかしこれらの国々ではその後の感染拡大は起きていません。
- 3) これらの国々ではクーラーをきかせた部屋に多くの人が入って部屋を閉め切って過ごしていることが多く、感染しやすい条件は北半球の国々と同じです。。春や秋という暖房も冷房もいらないシーズンに常に換気した状況が感染予防には重要だと思います。そう考えると暖かい国でも発症するが、大きくは広がらないと言えるのではないのでしょうか。
- 4) 直近の情報ですが、紫外線の影響の可能性も報道されていました。すなわち気温、湿度以外にも紫外線の強さが感染の拡大に影響しているのではないかという説です。前述のように、東南アジア諸国は紫外線が常に強いいため、COVID-19の感染が欧米ほどではないというものです。その説に従うと、これから紫外線が強くなる日本にとっては終息に近づいていくことが期待されます。日本では沖縄でほとんど感染者が出ていないことも、気候に加え紫外線の強さがその原因かもしれません。

感染の仕方

現時点ではコビッド19の感染の仕方は飛沫感染と接触感染が基本とのことでした。

飛沫感染は感染者のくしゃみ、咳、つばが飛んで他の人の口や鼻から吸引されて感染する形式です。接触感染は感染者がくしゃみや咳を手で押さえ、ウイルスのついたその手でドアノブや器具やそのほかのものに触れ、そこに付いたウイルスを他の人がそれに触れてそのウイルスが触れた人の口や鼻、目などから侵入して感染する形式です。飛沫感染も乾燥した空気では遠くまで飛びます。さらに閉め切った部屋でエアコンの風がある場合は一層遠くまでウイルスが届く可能性があります。

私が特に声を大にして言いたいことは、職場、学校、店舗その他可能な場所では4月～6月の3か月はエアコンを我慢して窓を開け、換気を十分に行うことです。エアコンによって室内の空気がグルグルと対流していることで感染者がいる室内での感染率がグンと高まってしまうことが懸念されます。

エアコンをかける→部屋を閉め切る→密閉した空間で感染者の飛沫が部屋中にまん延する→多くの新たな感染者の発症 ということにならない為にも、この春から初夏にかけてエアコンを可能な限り使用しないことと、部屋の換気に注意したいものです。

このことは「密集、密閉、密接」を避けることとセットで考えたいと思います。

暑い国や後進国では、エアコンをかけた部屋に大勢の人が集まりがちです。エアコンの使用を控えることと換気の必要性をもっと日本から訴えなければと思います。

発酵食品の価値の再評価

日本におけるコビッド19の感染拡大が欧米よりも極端に少ない一因として、発酵食品の普及があると思います。味噌、醤油、納豆、漬物などの発酵食品が免疫力を高めるという事は世界の学者たちでも常識とされていますが、発酵食品は日本が世界で最も消費しています。今般のコビッド19が世界的に終息したのちは、発酵食品をふんだんに使用した日本食が免疫を高めるという事実を官民一体となって世界に発信したいものです。インフルエンザに加えて、コビッド19も今後、毎年襲ってくることになるかと予想されます。ワクチンや製薬の開発は急務ではありますが、個人個人が自衛手段として、自身の免疫力を高め、自分の命は自分で守れるようにすることが大切です。日本人の食生活も欧米化がすすみ、これらの発酵食品の消費量は年々落ちていっているとされています。我々も普段の食生活を見直し、日本食を通じて世界に貢献したいものです。

私が副理事長を務めています、「NPO日本ハラル協会」も、味噌や醤油の多くの食品メーカー様の「ハラル認証」の取得による輸出振興のお手伝いを通じ、日本の発酵食品の海外での普及に取り組んできております。日本の食品メーカーの海外進出を通じて日本の食文化を世界に広めていくことで、ウイルスとの闘いに負けない免疫力を世界中の人たちに高めていただければ素晴らしい人類への貢献となります。

また、ヨーロッパで代表的な発酵食品であるヨーグルトについて面白いデータに気が付きました。COVID-19の感染とヨーグルトの関係を調べてみたのですが、ヨーグルトを大量に消費している国、トルコとブルガリアは新型コロナウイルスの感染者も死亡者も、イタリアやスペインに比べて極端に少ないことが分かります。もちろんラテン系の人たちの民族的な社会的距離による濃厚接触の影響も大きいし、その他いろいろな要因があるでしょうが、発酵食品であるヨーグルトにもその一因がありそうです。

イタリア、スペインとヨーグルトの消費大国及び日本との比較

* () 内は100万人中の感染者、死亡者

国名	人口	感染者	死者
イタリア	64,00万人	139,500人 (2,180)	17,700 (276)
スペイン	4,650万人	146,700人 (3,154)	14,560人 (266)
トルコ	8,200万人	38,000人 (463)	812人 (10)
ブルガリア	710万人	593人 (83)	23人 (3.2)
日本	1億2600万人	4,260人 (34)	81人 (0.64) (4月8日現在)

*ヨーグルトの国民一人当たり消費量

世界1位：トルコ (35kg)

2位：ブルガリア (29kg)

上記からわかるように、スペインでは人口100万人対し2840人が感染し266人が亡くなっているが、ヨーグルト消費大国は格段に少ないことが分かる。さらに日本はそれらの国々よりも少ないことが分かります。

アジアの現状と日本の今後の感染拡大

アジア各国のコビッド19による死者数を列挙してみると

台湾 : 5人

シンガポール : 6人

ネパール : 0人

タイ : 30人

マレーシア : 63人

インドネシア : 221人 (4月8日)

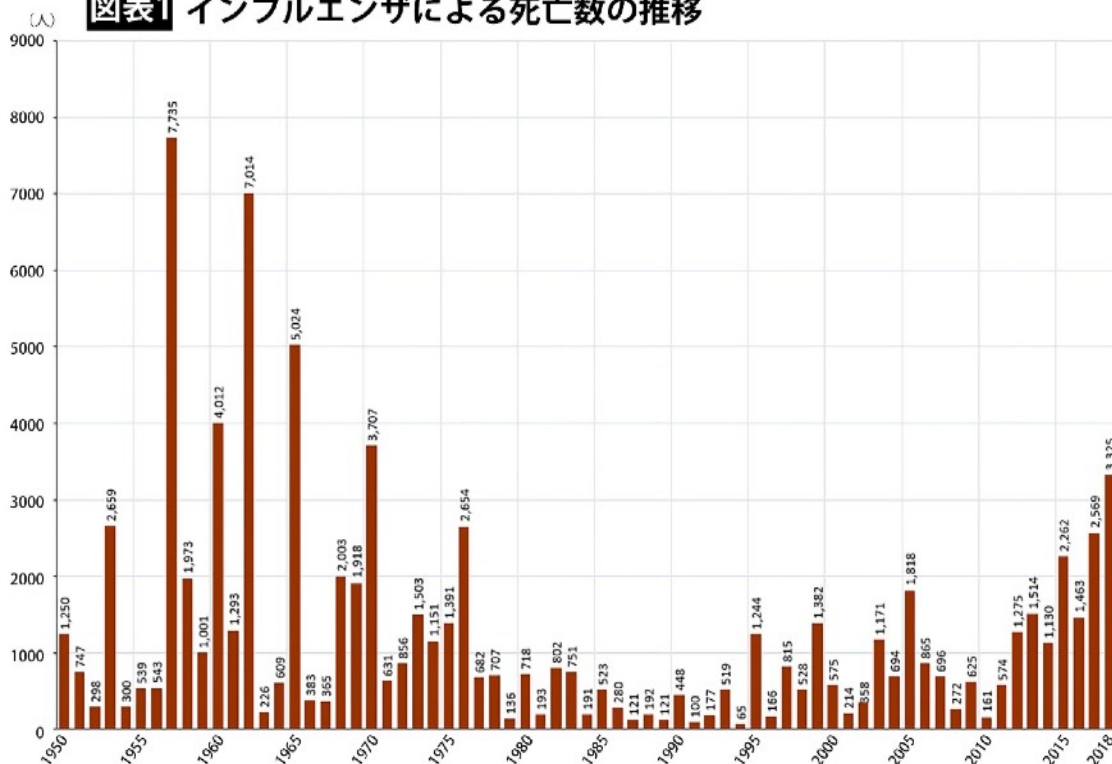
となっています。これらアジア諸国の感染者の拡大が、欧米の惨状とは比較にならない程、小さいことを考えると、感染が拡大するか否かは気温、気候が大きな原因であるという見方が有力です。空気が乾燥している冬は咳やくしゃみなどによって、より遠くまでウイルスが飛んでいきます。一方、湿度の高い環境ではウイルスは遠くまで飛びにくいと言われます。アジア諸国の気候が高温多湿であることが、現在アジア諸国でのコビッド19の感染拡大を阻止していると考えられます。そう考えるなら日本の夏も同様に湿度が高く蒸し暑いので、この気候のアドバンテージを味方にできるのではと、ひそかに期待しています。インフルエンザウイルスなども平均気温28度くらいでほぼ終息しています。上記の事柄もふまえて考えれば、日本においては国民の協力に加え季節変動が大きく作用して、**梅雨明けの7月末から8月の初旬位にCOVID-19感染は終息の時期が来るのではないのでしょうか。**

今なお感染者は増え続けていますがGW過ぎにはピークを越え減少の一途をたどっていくと信じています。

COVID-19よりも怖いもの

厚労省の統計によりますと2019年のインフルエンザが直接の死因となった日本人は1年で3325人となっています。私が生まれた1959年頃は7,000人以上の方がインフルエンザで死亡していました。その後ワクチンの開発などにより死亡者は激減し、1994年では65人まで減りました。ほぼ完全になくなったかに見えたものの徐々にまた増え始めたようで、この10年間は再び増え続けています。インフルエンザについては「超過死亡」というものがあります。すなわちインフルエンザによって引き起こされた別の死因の死者を入れると昨年では1万人以上の日本人が直接、間接的にインフルエンザで亡くなっているようです。

図表1 インフルエンザによる死亡数の推移



(注) インフルエンザを死因とする死亡者数(暦年ベース)
(資料) 厚生労働省「人口動態統計」

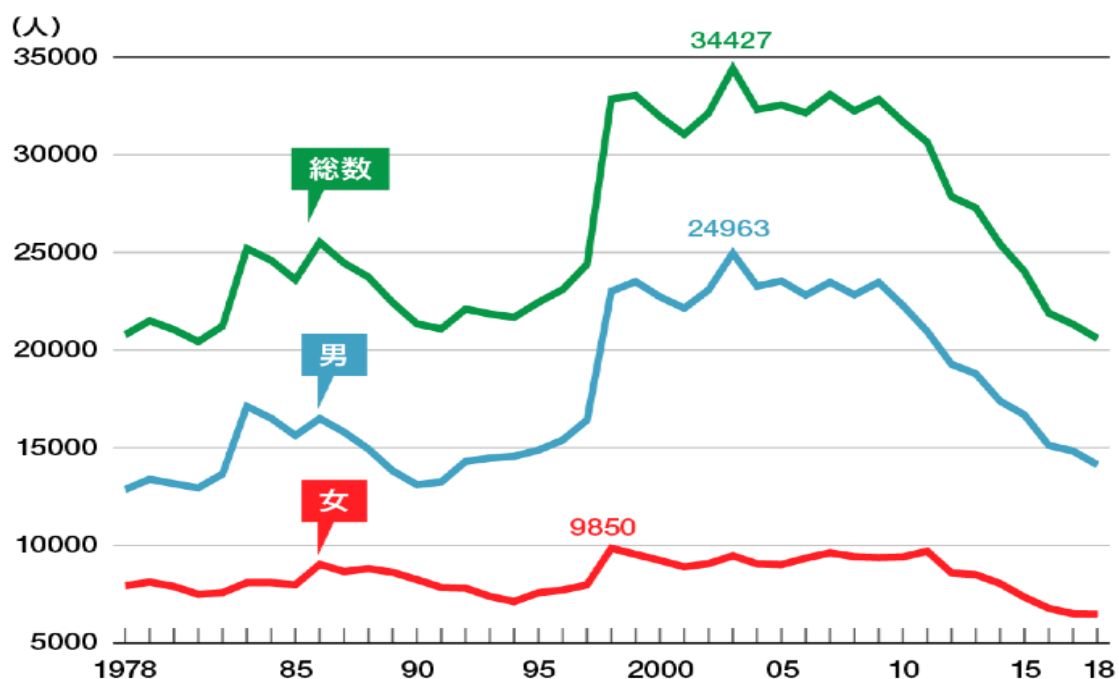
ほとんどが老人ですが、例年小学生の死者も多く出ています。

現在、よく言われることのひとつに、「インフルエンザはワクチンや製薬がすでにあるのでさほど怖くないが、COVID-19はワクチンも製薬もまだ開発されていないから恐ろしい。」

という意見があります。しかし、ワクチンも製薬もすでに開発されているインフルエンザで、表のように例年多くの方が亡くなっています。そのことから考えなければならないことは、COVID-19もワクチンが開発されたとしてもそれだけで安心できないし、むしろインフルエンザの方が怖いかもしれません。また表で見るように、1994年には、日本全国で65人にまで減少した感染死亡者数が、この10年間はほぼ、毎年のように増え続けています。インフルエンザのように、COVID-19も今後、毎年やってくるものと覚悟しなければなりません。

経済が破綻することで自殺者急増することも心配です。
 警察庁のデータを見ますと2018年の自殺者は2万千人を下回りました。
 阪神淡路大震災のあった1995年から自殺者は急増し続けます。倒産や破産者の急増
 失業者が増え、住宅ローンを返済できない人も相当な数になり社会問題となりました。
 割合としても中高年の男性が40%以上でした。2003年のピーク時は34400人以上で、
 毎日100人位の人が自殺に追い込まれていたことになります。2008年リーマンショック以
 降、少しずつ日本経済は立て直し、2012年の安倍内閣以降、自殺者は急減しています。

自殺者数の推移(自殺統計)



警察庁「自殺統計」を基に編集部作成

nippon.com

しかし、今回の新型コロナウイルスの経済的な打撃はあまりにも甚大で、企業や個人への経済支援を相当うまく進めないとせっかく減少した自殺者も再び急増するのではないかと危機感を持ちます。現時点の新型コロナウイルス感染の死者は81人（4月8日）ですが、その経済支援をうまく行なわなければ、数千人の自殺者を増加させてしまうことにもなりかねません。新型コロナウイルスが命を奪うのは、ほとんどが高齢者と持病を持つ人、免疫力の弱い人であり、それ以外の人自身自身の命に対してはさほど恐れることはないはず。グラフからみてもわかるように、自殺者と景気変動は相関関係があり、その多くは働き盛りの中年男性です。まだまだ社会で活躍しなければならない人や家庭を守っていかねばならない人も多くいるはず。

今や世界的にもCOVID-19の感染による死者数は10万人を超え、大変悲惨な状況になっておりますが、マスコミの報道はあまりにもCOVID-19だけに突出しており、それ以上に多くの死者が出ている自殺者やインフルエンザなどの既存の社会問題についてはほとんど取り扱っていません。我々が注意すべきことや恐れるべきことは他にもたくさんあります。俯瞰的な見地からCOVID-19の問題をとらえ、経済危機による生活困窮者の増加やインフルエンザ感染の死者の増加など、既存の問題についても見逃さないようにしたいと思いま

す。

旅行業、観光産業の復活のシナリオ

日本でコビッド19の感染被害が十分に収まった後、旅行業界とともに国内航空路線や観光バス、ホテル業界、観光地の各施設を一斉にフル稼働して国内旅行を活発に行い、国内の景気をリードしていかなくてはなりません。そして海外については、前述のとおり、アジア各国への海外旅行と現地からの訪日旅行を、この夏以降に再開していきたいものです。もちろん自社の経営の立て直しと当社の社員の生活の為にもそれを強く熱望していますが、さらには、自粛が長期にわたり続いていることにより、精神的にも滅入っている多くの企業で働いている社員様にも楽しい旅行を実行していただき、心身のリフレッシュと閉塞感の一掃にお役に立ちたいと願っております。

また、すでに国を挙げて取り組みを開始していた「働き方改革」の一つとして始まったテレワーク、在宅勤務は、今般のコビッド19対策によって一層加速すると考えられます。時短や感染防止など多くメリットがある反面、ストレスがたまりやすく家庭内暴力が増加したとの報告がフランスでは報告されています。また、それによって失われる組織の一体感や帰属意識の欠如などにより組織の弱体化が進行していくのではないのでしょうか。

ラグビー日本代表の活躍で我々が感動し、思い知った「one team」の連帯感やメンバー同志の絆、「one for all」の精神は日本の強さの根本的なものでした。

我々の提案するレクリエーションや旅行、視察などが組織の結束や信頼感、連帯感の醸成に寄与し、心の健康と見識を高めることに少しでもお役に立てますことを心より願っております。

日本も含め、今は世界中のどの国も自国のことで精いっぱいですが、いずれは回復した国から回復の遅い国々への支援を行っていききたいものです。日本が世界に先駆けて終息宣言を行うことで、世界のリーダーシップをとり、コビッドの終息と世界恐慌という最悪のシナリオの回避に大きく貢献できることを願います。

令和2年4月8日

株式会社ミヤコ国際ツーリスト
取締役会長 松井秀司